

『これが新か。』

『はア一昨年おととしの二月に買ふたところや。未だ一遍も水潜まらずやし。』

『潜る方が好えのやがナ。オイ誰も此幕まの風下へ坐りなや。』

『おい次や。放るで…………。』

『アツ。プツプツ。何で俺俺の顔へばつかり放るのんやいな。サア幕が張れたら、御馳走ごちそうを此方へ順々にお手操り〜。』

『俺俺は最初から荷物さゝれて往生せいじやうしてるね。』

『まア左様云わんと。今日一日は金満家の旦那旦那みたいな顔しいと云ふのに。』

『何でも拘かめへん。茶ア一杯汲くんでんか。』

『そ。茶アてな事云はんと。其處そこを酒らしふ一寸一杯酌しやくいでんかと遣りいな。』

『甚よくいゴテ〜云われるねナ。何で其様さまにゴテ附かれるねナ。氣兼無しきかみなしに何程でも飲むで。俺俺いかて土瓶つちびんに二杯出したアる。』

『解つた〜。夫れからなア。今日は羅宇仕替屋なかしとか齒入屋はしことか



云ひなや。皆旦那衆旦那衆や。煙管屋たばこやの旦那とか、履物屋くつやの御主人とか云ふ事に仕よふ。』

『紙屑屋かみくずやはいナ。』

『紙屋かみやの旦那やがナ。女もお梅はんやお竹はんでは具合が悪い。矢つ張り小梅ちゃんとか、小竹ちゃんとか云ふてると藝者げしやらしいて色氣いろけが有る。』

『よう彼んな阿呆あほうらしい事考えよるナ。どこの世界にあんな汚い藝者が有るやろか。』

『さアお一つ酌しやくさまひよか。』

『オツト溢あふります〜。アア結構けいこうなお茶お茶けで御座ご座りますナ。これは誰家だれがのお茶お茶けで。オ、貴下あなたはん處ところの。左様かいな。お宅おうちは宇治うぢに良え御親類ごしんれいがお有あんなはると見え、佳えお茶お茶けが手廻てまわります。』

『酒さけが宇治うぢから出るかいナ。』

『この位くらいのお茶お茶けになりますと一斤何の位くらいいたします。』

『酒さけに一斤いちじんで可笑おかしいナ。』

『此このお茶お茶けは悪酔あくすいひせえで良よろしおますな。ア、結構けいこうだす。モウ大分腹おながダブついてままね。』

